昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十四年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二三七号）

慈光

第二十一巻　第二号

目次

信仰の質疑に答う……近角常観……(1)
一道会の記(一)……榊原徳草……(5)
聞光録……北条恵実……(13)
念仏の華咲く人……木本達縁……(17)
歎異鈔第五章……花田正夫……(19)

信仰の質疑に答う

近角常観

信仰の問題について心がけたまう人々多くなり、遠方の国々よりわざ〳〵来りて道を求めたまう人々もあり。また手紙をもって胸中を打明けてたずねたまう人々あり。又東都に学ばれる人々の種々の境遇にありて安心を求めたまう人が多いが、どうしたことか信仰について疑いを抱かれる点、多くは皆同一に出ずるのは不思議なほどである。蓮如上人御一代聞書に「何事も同じようにきかで、聴かばかどをきけと申され候、詮あるところをきけとなり」とある、如何にも適切なる教訓である。今も皆の方々の尋ねらるるかどかどにつきて答をしてみよう。

一

人世の問題につきて煩悶するところはげしきゆえ、信仰によりてその苦しみを脱せんと思えども、いかにしても信仰出来ぬはいかがのものにや。

信仰は自分が信仰せんと欲して信仰出来るものにあらず仏陀の大なる慈悲を聞きて信ぜずに居られぬ故に信ずるなり。その信仰に入らば自然に煩悶が去るようになるなり。全体人生問題に苦しむことが信仰に入る動機とはなるも、決して信仰は人生問題を解決するの手段にあらず。

信仰はそれ自身が目的にして、人生の幸福を得るの手段と心得なば大なる間違いなり。現に歎異鈔にも『念仏は浄土にうまるるたねにしてやはんべるらん、また地獄に落つる業にてやはんべるらん、総じて存知せざるなり』とあるにあらずや。

又信仰すれば冥々の間に仏陀の御恵みはあることたしかなれど、現世の利益を目的とせんは真実の信仰にはあらじ親鸞聖人の祈祷を禁じたまいしもそのこころにあらずや。

そもそも仏を念じながら我身の幸福を祈るとは何事ぞや我身の罪深きことに気付きて懺悔の思いやるせなく、五体を地に投げて仏陀の御恵みの足下にひざまずけばこそ、帰命とこそ申すなれ。片手に自分勝手次第の人生問題を持ち

ながら、他の片手にて仏陀を拝みたてまつりて、などか一向専念と申すべき、名誉を拝み、幸福を拝み、成功を拝みつつ仏を拝むとは、いかにあさましき限りにあらずや。聖人の和讃に、

仏号をむねと修すれども　現世をいのる行者をば
これも雑修となづけてぞ　千中無一ときらわるる

とあるは、ここの急所をいましめたまうところなり。世は唯仏のお恵みのみと、純一無雑なるを専修というのである。一点でも、人生の幸福を念とする心の雑わらば、そは石の雑りたる食と同様である、雑行である、雑修である。されば蓮如上人も

『もろもろの雑行雑修自力の心をふりすてて、一心に阿弥陀如来、今度の一大事の後生御たすけ候えとたのみ申して候』

とある。故に人生に煩悶したるの極、人生を思い切りたると同時に真実の信仰に入れるのである。世の煩悶悲観のため身を亡すのは人世が思い切れぬから、彼のようになるのである。故に人生の煩悶を解くために信仰を求めるのではない、煩悶によりて人生のたのむべからざるを知り、唯仏陀の恵みのたのむべきこととなる、それが即ち信仰である。その信仰に入らば、以前に求め苦しんだ心が一転して皆夢の如くなるのである。自ら求めざるに何事もおのずからいたり、またたとい如何にあるも中心満足せらるるゆえ信仰の結果として自然法爾に人生の上に大安慰、大幸福が来るのである。現生十種の益はすなわちこれである。故に結局人生を思い切りて仏の御恵みを仰ぐのがすなわち信仰の真髄である。

二

我身は罪深し、人生は無常なりと、あくまで罪悪観も無常観も極まりつつあるも、なお信仰の起らざるは如何なるものにや、我久しき以前より人生のたのむべからざるを思い切りたるもなお煩悶をくりかえすのみにて、仏の御恵みを仰ぐあたわざるは如何。

全体仏のお恵みの見えぬ人が人生を思い切れるはずなし思いきったとは言葉のみにて、すこしも思い切っておらぬ、それ故煩悶を繰返すなり。それゆえ罪深しと云うも、人生無常というも、罪深きゆえ如何にせん、人生無常なるゆえ一刻も安んずべからずといえる煩悶状態である。これは罪悪の自覚とか、無常を悟ったとは決して言えぬ。

そもそもこの如く罪悪に苦しみ、無常に悲しみつつある現象は、いまだ真の罪悪観とか、無常観とは名づけられぬ真の罪悪観、無常観は、我は罪悪なり、世は無常なりという自覚である、即ち飽くまで罪悪の塊、無常の世界と思い

切られたる心持でなければならぬ。この気持は、仏の恵みが見えぬ間は決して生ぜぬのである。たびたびいう如く、たとい断崖に身は全く落ちて、もう仕方がないと思いながらも、なお枯木や枯草や、岩の角、蔓など手まかせにつかみて煩悶するは、我身を支えてくれつつある後の大なる力に気づかぬからである。闇が去りてから明が来るのではない、明が来るから闇が去るのである、人生を思いきるから仏の恵みが見えるのではない、仏の御手に救わるるゆえ何の苦もなく人生を思い切って、所謂懸崖（けんがい）に手を放つことが出来るのである。機の深信と法の深信とは一体の両面である、親の恵みの極りなきに感泣したる一念が、嗚呼永々の人生申しわけない不孝者であると懺悔の涙の落つる一念である。

全体煩悶しつつあるその人生の中に仏陀の御恵みの満ちつつあるのを仰がぬから信仰に入られぬのである。罪悪を救えばこそ慈悲の仏である、無常を離ればこそ常住の極楽である。すでにこの仏まします、この極楽あり、仏われを摂受したまい、この極楽に生れしめたまう。

我はあくまで罪悪の塊なり、世界はあくまで無常の世界なり、しかして、この仏あり、この慈悲あり、この本願あり。この本願を信じ、この仏に帰命す。

「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに」

即ちもがきて物をつかまんとする心のなくなったところである。

「悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきがゆえに」

即ち手を放って地獄は一定すみがそかしと、人生を思い切られたところである。

「煩悩具足の凡夫。火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとこそ仰せはそうらいしか」

何よりも、仏の御恵みに安んずるのが信楽開発の一念、即ち我等の心に光明のさしこむ一点である。

三

私はすこしも仏の存在をも疑わず、仏の救済をも疑わず、されど少しも歓喜の心おこらず、慈悲の塊と口には云えど、いまだすこしも実感を生ぜず。何事も仏のなさしめたまうところと思うて辛抱して居れど、すこしも歓びの心起らぬは、いかにも物足らぬ心地す。これは如何のものにや。

慈悲の塊とは、仏陀は唯広大極まりなき慈悲ばかりにて

何とも云うてみようもなきゆえ、その味わいを慈悲のかたまりと云うたのである。

すこしも歓喜のこころ起らずして、仏の存在を疑わず、救済をうたがわぬと云うても、それはすこぶるあやしむべき云い分である。仏陀の救済はその救済にあずかりてこそ疑われぬようになるのである。唯仏があると思うている、救済があると思うている、思うているのは信じているのではない。

西有穆山師のところに或求道者が参りて「天地宇宙は我と一体なりと思うて居ります」と述べたところ「思うているだけわるい」と申されたと聞きました。思うているのは心で作っているのである。自分の心で作った仏であるゆえに歓喜の念が起らぬのである。

如来が我を救うて下さると思うているだけの人がすこぶる多い、思うているのではない、たしかに救うて下さるのである。現に救うて下さる呼声があるのである。阿弥陀仏はその仏陀である。名号はその呼声である。しかもその仏その呼声が我々と遠く隔っているのではない。我々如き罪深き、苦多きものを救わんとの呼声である。この如き慈悲をきかば、我々は信ぜずには居られぬ、歓ばずには居られぬのである。

我々は理屈や道理で仏の救済を認めるのではない。(竟畢

救済は仏の本願不思議を信ずる一つである、しかもその不思議を不思議と信ずる上は何のはからいもなくなるのである。親鸞聖人が

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

との御述懐は、実に聖人が歓喜の極点を云いあらわせるおことばである。けだし聖人九十年の生涯すこしも艱難辛苦ともおもわれずして伝導したまいしも、この信念一つである。ことにこの御述懐は、常に仰せられしおことばなるも、彼の日野左衛門の門前にて、寒風吹きすさぶ夜、石を枕とし、雪の中に休みたまいつつ御恩を喜びたまいし時の感謝のおことばである。

「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし
　師主知識の恩徳も　骨をくだきても謝すべし」

弥陀五劫思惟の御苦労はすなはち聖人が粉骨砕身のご苦労となったのである。歓喜の心がおこるのおこらぬのといえるどころではない、実に天に踊り、地に躍るよろこびの心をもって満たされて、一刻も猶予して居られず、ここに人生の活動となるのである。これ皆感謝の発動、報謝の経営である。歎異鈔にある如く

「かたじけなくも我御身にひきかけて、我等が罪悪のふかきほどをも知らず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり」

一道会の記（一）

榊原徳草

実に無始以来ご恩をこうむりながら、これを喜ばず、曠劫以来罪深き身ながらこれを懺悔せず、実に何とも申しわけなき次第である、唯々仰ぎ信ずるより外はない。

〈求道、第三巻第九号〉

今日は一道会の日である。一年に一度の私達の待ちに待った池山先師追憶の一道会である。朝から心忙しく準備して、もうこれでよかったかなと胸は騒ぐ。案内の道しるべを張りに急いで歩く、昨年までは子供等がやってくれたが今年は一人も居ない、皆それぞれに独立して出てしまって老夫妻だけだから札張りもやらねばならない。

そのうちに昨年の一道会から毎月のように訪ねてくる仏教大学の女子学生の河合さんが手伝いに来てくれたので、大だすかり。河合さんは川畑愛義兄の法話を高倉会館で聴いたのが因縁で昨年の一道会からよく訪ねてくれる不思議な若い聞法者である。それから間もなく香川県の法姉である葛西まさゑさんの顔が見えた。葛西さんは十六年前に私が四国で講話したときの御縁の方で、昨年はじめてここへ来て、今日は一道会に初の参会である。当時膝に抱かれていた娘御がもう高等学校を卒業して今日は留守居だという。二三日前に名も告げずに一道会の日時を電話でたずねたのはその娘さんだったそうであった。

そのうちに参会者がずん〳〵集られる、四国の琴平から四五人位――あとで聞くと千葉さん高塩さんのグループとのこと――まだ私の知らない人々である。今年は未知の人が多いと思っていると、旧知の法友が姿を見せて下さる。信国先生が久方で来て下さった。四国の愛媛大学の仏青の学生九名は松本解雄先生の引率で来会。数年振りの参会であるが、今年は丁度大学の文化祭の期間に一道会が催されたので、京都奈良方面への見学の予定ですでに昨日は信国先生の専修学院で宿泊されたとのこと、大阪の仏青卒業者も一人これに加わって来られた。

また今日参会できない方で、すでに御手紙を下さった方や御供花料を送って下さって、一道会の時間には家で歎異鈔を拝読しながら京都を憶念するという法友もある。

懸念していた池山寿夫様が来られた。これで今日の一道会も柱が出来たとホッとすることが出来た。開会の時が迫ったが、参会者が少ない。しかし定刻に開始したが、読経中に続々と集まり、五十名位になった。

○

例年通りの順序で、先ず先師影前で阿弥陀経の誦唱、一同が助音して下さる。客殿一杯にお念仏の光風が滲みこむ

私は「劫濁見濁煩悩濁、衆生濁、命濁中、得阿耨多羅三藐三菩提……」の御文に声が塞がる。釈迦牟尼世尊の梵音亮々たる御音声にもまがえて、徳草よ、その煩悩熾盛のお前がそのまま御浄土への道そのものなのだよ、と仏からお聞きする感がしたからである。まことにお念仏の徳音ははるかに三千年を越えて、ここ浄住寺に仏の来迎が感ぜられるのであった。次いで歎異鈔の拝読もいつものように涙なくしては聖人に、池山先師に、お会いできなかった。

私は追憶会の開会の言葉に換えて大暑次ぎのようにお話しした。

今年は花田先生がお病気で参会されないのは誠に残念である。六月に一道庵に参ってお見舞したのでその概次をお伝えすると前置きして病状のあらましをお話した。

次いで私の所感を次のようにお話した。

池山先生に初めてお目にかかったのは三十歳の時、花田先生に勧められて京都の下総会館の講演会で、たしか京都女子親鸞会の主催であった。演題は「継母」、ドイツ語の本を訳しながら悠容せまらず、淡々とお話された。一般の仏教講話とは違いどこからお念仏の話が出てくるのかなと思って聞いていたが、別にありがたいという感じも受けないままで終ってしまった。会が終り、自動車で奥様と同車して帰られる先生の紺の背広姿とステッキ、ハンチングの帽子、それだけが印象に残ったのみであった。

それから、どうして私にとって、先生が無くてはならないよき人になったのか、順序も何も覚えていないが、いつの間にか私のすべてが先生の内に、お念仏一つに、引きつけられるようになってしまったのである。

煩悩の苦にひしがれると、蓮華谷のお宅へ走った。先生の前に坐ると、一切を見透かされているようで怖ろしい思

いと、又抱きかかえられている温かさと、二つが一つになってくる。そこで思いきって苦衷を申し上げると、先生はいつでも、よくきいて下さったのち、

「ああ、そうですか、南無阿弥陀仏」

と仰言られる。そうすると私もお念仏する、そうしているうちに、すっかり胸の暗も晴れて、有難さとお念仏で、もう何もかもかたがついてしまう。あの帰りの坂路をどんなに軽い足どりで帰ったことか、どんなに喜びの顔を振り向けて坂の上のお家を仰いだことか。

今度は先生に「それはどうもいけないね」と言われはしまいかと、坂の下で何本も煙草を吸って考え込む、そして思い切って先生の前に出て苦悩の胸を吐き、お顔を仰ぐ、先生はまた

「ああ、そうですか、南無阿弥陀仏……」

と仰言る。私の闇は溶けてお念仏で埋まって、それがあふれて私の口からお念仏が流れる。先生はいつでも

「ああ、そうですか、南無阿弥陀仏」

それだけで、一切が片付いてしまう。

先生の御講話には、いつも、御自身でもそのたびに指適されるように

「親鸞におきては、を池山におきては、とおきかえて、よき人を親鸞聖人とおきかえて、ただ念仏して……」

あの歎異鈔第二章の、聖人御自得の金言が、池山先生にすっぽり入れ換っての、ただ念仏して弥陀にたすけられるあの御講話が、それが、目の前の先生の、

「ああ、そうですか、南無阿弥陀仏」

のそこにいのちして私に面しておられる。それが私の煩悩業の姿をそのまま不可思議に助けあげてしまわれる。

私は何十回、池山詣でを重ねたろう。私はどんな苦悩が湧いても、先生の所へ行けば解決される。私は実に先生が在って生きて行けた。先生が蓮華谷に居られ、そこにお念仏しておられることが何よりのたのみであった。

然し遂に先生は逝かれた、三十年前である。それからしばし途方にくれた、もう直々先生にお会いすることが出来ない。空虚の胸に、それでも歎異鈔の第二章第九章が光っていた。けれどもどうもすっきりしない、私はまどった。

しかし、先生の常の仰せの「ただ念仏」が、直接私にひびくようになってきた、先生はいつかの講話に「念仏は自動作用する」と云われた。ほんとうにお念仏は私に自動作用して下さって、いつの間にか、「ただ念仏して——たのもしさ」あの最後の御講話の「ただ念仏して」が、身につくようになってしまったのである。

「池山におきては、ただ念仏して……、よき人、親鸞聖人の仰せを蒙りて信ずるほかに、別の子細なきなり」

のお言葉が、そのまま榊原におきては、よき人、池山先生の仰せを承りて南無阿弥陀仏になってしまったのである。

最後に、先生の昭和五年に名古屋の信道会館でのお話が昭和三十七年の信道誌にのっているので、それをお読みする。題は「しみこみ」である。（但しこれは慈光誌十四巻十号にすでに発表せられているので、ここで省略する）

次ぎに池山寿夫様の追憶談を記します。寿夫様のお話を伺っていると、その風貌その音声が先師そっくりで、お話の合間にせられる咳の音まで瓜二つで先師の声咳に接した吾々一同はしみじみと先師の追憶にひたるのでありました。

私が御指名の池山寿夫であります。ただ、父栄吉の息子であるということが一番に御指名を頂いたようなことであります。

年に一度のこの一道会は、私に一ケ年間を振りかえらせて頂く記念の会となっております。私は十月生れですので、丁度年の暮れの味わいのようでもあります。

私はこのあいだ六十九歳になりました、昔流に数えると七十一歳で、父は六十八の数え年で亡くなったので、父よりも二年多く生きているわけであります。

先日の誕生日に東京の孫がお祝いに風船を沢山くれた。これぐらい生きてくれというので、数えてみると百二、三十の風船です。絵はがきもくれましたが、絵はオームが描いてあります、その口から「長生きせよ〳〵」と書いてあります。私も、もう「長生きせよ、の年齢になったのかなア」と寂莫たるものがあります。

私は母を亡くしまして、しばらくして第二の母を得ました。私はこの第二の母に感謝しておるのであります。父を離れて私はペルーに行っておりました、それで父の臨終にも会えませんでした、そんなわけでこの第二の母がどんなに有難いかしれないのです。

妻を持ち二人の生活がはじまり、ゴチャ〳〵して子供があるようになって、それが大きくなり、各々独立してしまう、又、二人になる。これが夫婦の常道で、これを辿れるのが幸福な夫婦であります。さて、ただ二人、この家内が居なかったらどうでありましょう。それがまた父を思います。あの第二の母がいてくれなかったら、ああいてくれてよかったと。

二人して父のことを憶うのです。私、七十年間、虚勢の張り通しであります。自分の行いを正しいものにしようと屁理屈をつけることにつとめてきたのみ。本当に、お念仏が、絶対のお慈悲がなかったなら、聖人が日本に出て下さ

らなかったら、更にそれを私に伝えてくれた父が無かったら、私はどうなったか？

きたないお前が、うそのかたまりのお前だから、可愛いのだ、このお慈悲がなかったら、誰によって救われ得たでありましょうか。しみじみと私この頃思うのであります。

よく「わが人生を語る」と云いますが、それは現われている一点を語るのみで、その下に無限の底があります。それが業であります。その業を根本として、その末に七十年がチョコッと附いているのであります。私は三人の生命を私の子供を作り出したのでなく、その業をひき延ばしたのみで、子供に申訳けないことであります。

父、聖人、私には同じように思う。親鸞聖人は人間の道を歩いて肉食妻帯して下さった。現在この人間生活の宇宙時代というようになってきて、人間の道を歩きつつ月の世界を目指す今でも、縁起をかつぐ人々があります、吾々も縁起などに縛られがちでありますが、七百年前に聖人は絶対のお慈悲一つを仰がれ、他の一切は捨てきられました。七十年、向い合って坐って下さる方、それは聖人であり、父であります。

若い方が沢山居られますが、私は七十歳になりました。これはしかし全部の人々に来ることであります。この人生を大事にして下さるようにと思うものであります。その日その日のことを味わうことが大事にすることです。私共は、楽しいことは大事にするけれども、苦しいことは大事にしない。しかし、苦しい時に、それを相手にして下さるお方があるこれによって、こわがらずに、自分の姿をみつめることが出来ると思うのです。少くとも私、それによって七十年間弱い線だが生きてきました。お父さん有難う、お母さん有難う、親鸞聖人有難うと頭を下げざるを得ない。皆様の前だから憶面もなくこんなことを申上げることができる、有難うございました。

次ぎに白井先生のお話の概要を記します。

只今は、感激の深いお言葉を承って……。もう今日お参りしました要はこれで済んでしまったの思いがしきりに起って参ります。しかし毎年の例にしたがい私の感じをすこしのべさせて頂きます。

只今、池山先生のお話を承っていてしきりに私の母を憶い出したのであります。母は三十一歳で私が十一歳の時に亡くなりました。私は今年で八十歳を越しました。若い母に別れてから七十年にもなるのですが、その母が何時も附き添っていて下さる、その思いがしきりであります。私の手元にその母の日記帳が一冊、雁皮紙を四つ折りにして綴じたもので、それも毛筆で書いてあります。

はじめに私のことが書いて「成坊が高い熱が出てきた、お医者様を呼んで診ていただいたが、何の病気かわからないが、熱が高いから危ない」とあります。

次ぎの日の日記に「成坊の顔に赤いツブツブが出来て、ハシカとわかった」と書かれております。私、五六歳の頃かと思いますが、何かがらんどうの部屋の中を母が赤い毛布で私を抱いて泣いている。涙が流れているその頬を私におしつけて、成坊が死んだらどうしょう、母さんも一緒に死んでしまいたい、と。この姿が私に何か問題が起ると、この母の姿が出てくるのであります。その時の母の姿が出て来る、このことは若い時には自覚しないが、老いてからはよく思い出されてきましてね……。

年をとれば記憶が薄れて、この間も講義していて判りきっている哲学者の名を忘れてしまって思い出せない。それなのにこの母の姿は忘れられないのであります。

仏様は八十歳で亡くなられました。八十年のお生涯でありますが、仏様が亡くなられても御弟子達が仏の御生命を憶うと、なくなられたのでなく、強く仏の御生命が働いている。仏のおいのちは七百阿僧祇劫の間とか、そんな数で数えられるのでなく、窮りないおいのちとか、大乗仏教になってからは如来の寿命は永遠であるとの考えが起っています。仏の寿命の永遠性、それは概念だけのものではないそれは私に七十年、母のいのちがつきまとって下さる、それによって仏のおいのちが限りないとは、仏の弟子が仏に対して身をもって感じた体験の言葉と思わずに居られないのであります。

それから又憶い出されたことですが、近角常観先生から叱られたことです。私は仙台の二高の学生時代にキリスト教の教会に通っておりました。お説教を聞いたり、讃美歌を唱ったり、清いすがすがしい気持で二年間ばかり過しました。教会に通い出したもとは、上田敏博士の〃耶蘇教という本に「神は愛なり」とありますね。それ以前に心にうけていた孔子様の「天」という思想、天とは何であるか、天とは冷たい理法のようなもので、この天が親しい愛をもった人であってくれたらよいのにと思ったことでしたが、それが上田博士の「神は愛なり」の言葉で、それで教会に入ったのでありました。そのうちにバイブルを読んで、信ずる者は天国に行く、信じない者は裁いて地獄へやるという、キリストの思想の根本は審判（さばき）の思想であるという、これに打ち当りまして、そういう神は、愛の神では無いではないかとなって、つまずいてしまい、キリストによれば、母は地獄に落ち、私は天国へ行けても、地獄の母は救えない。天国と地獄を造る神の教、それで教会を離れることになりました。ここにも母の憶い出が強く働いて

おります。

教会を離れて一年位、どうしたらよいかとゴタゴタしておりましたが、それを高校の倫理学の教授の三好愛吉先生に訴えましたら、先生は、それは倫理や哲学で解決できることではない、と云われ、それで近角先生を御紹介下さったのですがね……。三好先生が言われるのに、近角先生は何時お話を聞いても同じことばかり話されるお方である。三四回聞くと解ってしまって、信心卒業と思うかも知れない、それではいけない、同じことを常に話す人こそ本当の信仰の先生である、こういう人は稀な人である。その底まできく、よく聞き抜くように、とのお注意でありました。これは三好先生が私の軽卒な飽き易い者なのを誡めて下さったのであります。

東京に上って近角先生に初めてお目にかかったとき、先生は非常な情熱をもってお話されるが、私にはさっぱりわからない。あとで三好先生の名刺をもって参り「親鸞聖人のことを知るのにどういう本を読んだらよいのでしょうか」とおたずねしたところ、先生は「歎異鈔を読むように」と仰言って下さったのであります。それから歎異鈔を読んでおりますうち「浄土の慈悲」という言葉に出会いました。仏は迷っている者を救うという「六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈めりとも、神通方便をもてまず有縁を度すべきなり」この語が私を捉えましてね。それは私と母と同じさとりの世界で会える、母が迷っていても母を招き寄せて同じさとりの楽しみの味わいをうることができる、そういうことを歎異鈔で知らされた。キリストのさばきの世界と違う、さばき捨てることがない、お浄土で母とともにさとりの世界に入れるという、仏教にはそういう世界があるということを知らされましてね。私宗教上のことでも理屈で考える変な性質がありますが、生命の永遠、浄土はどうしてあるのか、色々のことがごたごたとありまして迷って居りましたが、近角先生、島地大等先生、多田鼎先生など、多くの先生方に導かれたのでありますが、母との関係においてもそういうことで安らぎを覚えたのであります。

こういうようなことの前に近角先生に叱られた話、私はそれ以来、四五年間も日曜講話を聞いたのですが、同じ話を承って、それが解ったようで、どうも解らないのですね、親鸞聖人のお話は解ったようで解らない、近角先生のお話の中心は「やるせないお慈悲」であります。それを譬などで懇切にお説き下さるが、中心になるやるせない御慈悲が解らない、それが四五年振りでありました。ある夏の求道会の夏期講習会、そのある夕方の座談会の時であります。先生のお話で勇躍歓喜する人、又は告白をなさる方、

などでお念仏を喜ぶ人々の声が響いております。自分は解ったようで解らない、やるせないお慈悲が解らないのです。とうとうこらえきれずに質問をしました。

「私はながい間お話を承っておりますが、やるせないお慈悲、そこがわかりません。それは私が不真面目だから四、五年聞いてもわからないのです。どうしたら真面目になれるでしょうか」

というような、考えてみれば変な質問であります。すると先生は急に私の方を向かれて

「今頃君はそんなことを云っているのか」

と云われて、先生は膝をつき合わせ、畳をたたいて

「僕が何時まじめになれば信心がいただけると云ったか君が真面目になれと言っているのでない、君が真面目になれないのを見抜いて可愛相と仏は見て下さる。君は自分で真面目になれぬというが、なれないのが君の本性である。仏はその不真面目な君を可哀相である、そう云って下さるのだ」

と強く仰言って下さったのであります。——それで私ははじめて、真面目になれないことを知らせて頂いたのですその私を見捨てずに仏は呼んで下さるのだと、先生からきっく叱られてしてね。

私は憍慢だった、不真面目でしかあり得ないのを、いかにも思いあがった傲慢だったと知らされましてね。その時から、まじめになろうのあせりから解放させていただいたわけであります。その不真面目な者のために仏が代って下さると心を転ぜしめられたので、それが近角先生から叱られて聖人の教を聞く一つの見解を与えられました。

そうしていながら、お浄土へ参って、母を六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈んでいてもまず有縁、亡き母を救うのだという、それも憍慢な心でして、可成り長い間そんな心でおりました。その時分は、朝鮮の京城大学に勤めるようになっていましたが、大学の前のホテルに泊っておりました。そこは朝鮮総督府の構内で、王城のあるところ、その庭に池があってよく散歩したものです。或る日散歩しながら、浄土の教えを聞き、念仏申す身にどうしてなったか、どうしてこういう気持になったのか。これは少年の時は母に別れたことから浄土の教をきくようになったのだと、フツとそう感じました。それと同時に、自分が先にお浄土へ往って母を救う、そうでなしに、母が先に、若い身をお浄土へ往って下さって、母がお浄土から現れて私を導いて気付かせて下さったと思わせていただきました。永い間、傲慢なことを思っていたものでありました。

そのほか色々のことがありますが、今日は、榊原先生、池山先生のお話をきいておりまして深く感じ気付かせて頂いたことを話させていただきました。失礼いたしました」

聞光録

北条恵実

一、

今月で「聞光」が通巻二百四十号となりました。丁度二十年間発行して来たことになるので、小さな発行物ながら私としてはやはり思い出の多いことであります。その間、十四年前の一九五四年にビルマのラングーン市で開かれた第三回世界仏教徒大会に出席し、インドの仏蹟巡拝、欧州巡歴の世界一周旅行をした六ケ月を休刊しただけで、あとは少々無理をしても毎月発行してきました。

二十年前というと私がスタクトン在任中で、第二次大戦が終ってキャンプから出てきて間もない時で、日系人社会はまだ精神、物質両面ともに落ちつかず、したがってどこの仏教会もすべての点で苦しい時でありました、大低の仏教会は空いているホールを開放してホテルとし、キャンプや、東部から帰ってくる人々の足場として大いに役立っていた頃で、今から思うと隔世の感があります。

「十年一昔」というのですから変るのも当然で、その頃生れたベビーがもう結婚する年令になっています。この「聞光」も二十年の歳月を経たのですから、ベビーから一人前になっているはずですが、一向その様子はなく、細々と続いているだけのベビーで、ただ最初と変ったといえば、自分が手でガリ版を書いていたのが、日語タイプに変ったというだけです。

このように誠にささやかな「聞光」ではありますが、親にとっては、どんな出来の悪い子でも、いやかえって出来の悪い子の上に心がかかるように、この「聞光」は私にとっては、やはり気にかかり心にのこる出来の悪い子であります。更に思えば私自身がその出来の悪い子供自身であります。

ところで生れでてきた子供の名をつけることは、親にとっては気を配ると同時に楽しいことでありましょう。二十年前、この小紙を何とよんだらよかろうかと思案をした上親鸞聖人の御和讃の

光明てらしてたえざれば　不断光仏となづけたり
聞光力のゆえなれば　心不断にて往生す

から名を頂戴したのであります。

仏教には意味深い言葉が沢山あります。たとえば観音とか、この聞光という言葉もそうであります。観音とは音を観るということ、聞光とは光を聞くということで、聞く音を観、見る光を聞くというあたりに深い意味あいがあると思います。

そこで、光を聞くというのはどういうことでありましょうか。由来、阿弥陀仏は無量寿と無量光を円備せられた仏であり、そのお智慧をあらわす無量光の方を、この御和讃に特にあらわして「光明てらしてたえざれば」と讃えられたのであります。

かくて阿弥陀仏はお智慧のかたまり（無量光）であるがまた同時にお慈悲のかたまり（無量寿）でもあり、その功徳を、すべて南無阿弥陀仏の六字に封じこめて、私に廻向して下さるのであります。

だから、阿弥陀仏のお光をも、聞即信（もんそくしん）と領解するのだぞと、聞くことの大切さを聞光の中に示されたと頂いております。

二、

ものは耳だけで聞くものではなく、又目だけで見るものではない。「心ここにあらざれば、見るとも見えず、聞けども聞こえず」である。ぼんやりしていたらどんなよい景色でも目で眺めながら見落とすし、どんなよい音楽でも耳できながらそのよさを聞きもらしてしまう。その反対に心さえそこにあれば、耳に聞こえず、目に見えなくとも、よく聞き、よく見ることが出来る。これを心の眼、心の耳というのである。

ヘレンケラー女史は今年の春八十八歳の高齢でなくなったが、その一生は誠に尊い一生であった、二歳の時に重い病にかかって、そのために盲・聾・唖になってしまった。七歳の時から家庭教師につき特別教育をうけ、盲人タイプを打ち文章を書き、又読み、話しが出来るようになったが盲と聾は一生なおらなかった。そうした大きな困難の中から大学を卒業し、沢山の立派な書物を著し、世界中を廻って無数の身体障害者に話しかけて心からの友達となり、世の中に大きな光を与えたのであった。日本にも二度行っていられる。このケラー女史は、見えぬ目、聞えぬ耳を持ちながら美しい花を見、小鳥の声や、音楽まで聞くことが出来るといっている。この耳、この目は、肉体をこえた心の目であり耳であったにちがいない。

釈尊のお弟子のアナリツは或時仏陀のお叱をうけて修行精進のため、長い間一睡もせず、とうとう盲になってし

まった。だが肉体の目がつぶれた時、心の眼が開いて悟りに入ったという有名な話が伝えられている。

かくて心の目と耳が開くとき、私達は今まで気づかなかった世界があったことに気がつきおどろかされるのである。親鸞聖人のお念仏の教えでいえば、阿弥陀仏のご本願に気づかせて頂くことを、信心とも、安心ともいうのである。

ところで、この御本願に気づかせて頂くことは、先にご本願のおそだてがあったればこそである。月の光で月を仰ぐことが出来るのと同じである。ヘレンケラー女史には特別教師のサリバン嬢（後のメーシー夫人）が不断につきそって血の出るような指導にあたっているし、アナリツには偉大な釈尊のお尊きがあった。即ち調熟のひかりに育てられて、物の世界をこえた心の世界がひらかれたのである。

さめたときそばにありとは思うなよ、宵よりまもる母の手枕

のとおりで、阿弥陀仏はいつがはじめともしれぬ長い間迷い苦しむ私をやすみなく護りお導き下さっているのである。かくて仏の御真実によってご本願を信知させていただくのである。煩悩のために智慧の眼と耳とを失った無眼人無耳人の私が、今不意議にも本願の正覚大音を観、不断光を聞くことが出来るのである。

「聞光」はこうした味わいを示されたお言葉だと思うのである。

——完——

母観音

母という不思議な存在を、子よ、あなた方、はっきりと意識の中に入れていますか

母という不思議ななぞを、子よ、あたな方、はっきりと解きえたことがありますか

母という存在は、子にとってあまりに大きく、意識の中にたたみいるべく、あまりに大きい

母というなぞは、解かんとして解き得べく、あまりにも深くこまやかきなぞなり。

さらば、母なる我の、子をおもう母のこころをかたりてもみん

折から東京の外の面は秋雨　うすら冷たく庭草のぬれそぼつなか、目にいるは、つわぶきの花の黄のいろ

子よ、とよびかくべくあまりに遠い、わが子はフランスのパリの都に、

子よとよぶ声より先に　わが目には、はや涙、秋雨にふるるつわぶき

あわれつわぶきの黄金の花よ、その黄金色こそ、おさなき日の子のいでたち—制服のボタンのいろに　制帽の徽章のいろに—

あわれ子よ　お茶のむか　パリの都に　絵をかくか

パリの都に

お茶のみて母をや忘るる、絵をかきて母をや忘るる

忘るるも、よしやわが子よ、にっぽんの雨ふる夕、つわぶきの花をみつめて　母はおまえを懐しみ泣く

母はときどき掌を見る　おまえを育てたとき　おまえのおしりを時々たたいて叱ったおもいで

たたいたのも　なでてやったのも　愛情だった、みんなみんな、愛情だった、

そうしておまえは好い子に育った　今はパリの先端画壇の中堅作家

お茶のむか、わが子よパリに　絵をかくか、友と語るか

にっぽんの母を忘れて

忘るるもよしやわが子よ　育ち行くお前のいのち、才分の弾ぜあふるるに、いつしか母のことなど

忘るとも、よしやわが子よ　おまえが母は「母観世音」

お前が母を忘れていても

おまえの母の「母観世音」いつもおまえを忘れていない　宇宙の母性も観世音菩薩

衆生の母性も観世音菩薩　衆生がよべばたちどころに

難を救うは観世音菩薩

悲しきときは母をよべ　おまえの母は「母観世音」

たとえつねに忘れていても　悲しきときには母をよべ

ああにっぽんの秋のくれがた　つめたい雨がふっていますよ　つわぶきの黄いろい花が目にしみる

岡本かの子女史が岡本太郎氏に送った詩。「聞光」所載よりいただく。

ゲェテの詩片

うつし世にいと美しき姿、

そは、

子を抱く母の姿！

うつし世にいと尊き姿、

そは、

子等を前に端坐する

母の姿！

念仏の華咲く人

木本達縁

どうした不思議の御縁からか、広島県福山市松永の藤原ツルエさんと私とは兄妹の如くお念仏に心をかよわせながら三十年間、月に一度の手紙の来ぬことはなかった。

足の立たない不自由な体のうえに病弱のためどんなにか人知れぬつらさをたえたことであろう。つらいときには、「お母さん！」と亡き母の名を心の中に呼びつつお念仏に生きぬいたのである。

人並でない不具の子を涙でそだてたお母さん。私故に泣いて下されたお母さんはそのまま如来様のお慈悲でありましたと母心の上に如来様のお慈悲をおがまれたのでした。不自由な体をもちながら何とかして役に立つ人間になりたいと独学で中学程度の文字がかけるようになり、なかなか味のある良い手紙を下さいました。

九月の手紙には腎臓が悪くて大変苦しんだが不思議に楽になったという喜びの手紙であった。頭が重く体が苦しいという手紙はいつものことであった。そうした弱い体をもつて生きねばならぬ自分をジッとみつめて、ほんに業の深い自分であると知らされる如来のみ光りを仰ぎ、そこからお念仏のよろこびになってわきいずる日暮らしでした。

お世話になる身であるという気持の上から、身内の者に対しても相手の顔色を見てよく心をくばるという神経質な点もあったようです。同情をかけられた喜びが一しおであっただけに思いやりの心が深く、非常に人情的であったと思います

気をつけて　行ってきなよと　送る母
旅路より帰りし我子　母夢中
なき母へ不幸をくゆる　夢ばかり
日に一度　母をしのばぬことはなし
わがいのち　ほとけのいのち　わがいのち
お母さんのたいたレンコンがたべたい

○

今日はめまいがする、

気分がフィフィしてならん、
死ぬる時はこんなになるのかなア
なにを言うまもない
お母さんがむかいにきているかも知れん

○

私は今生きていることがふしぎである。
ほとけさまのおかげにちがいない。

○

ふく風にまかすがままの　南無阿弥陀仏　柳かな

以上はツルエさんの日記の中からひらってみました。

毎月返事を書くのに追いまわされていたツルエさんの手紙がしばらくとぎれたので心配しました。一度見舞に行ってあげたいと思いつつその機会もえられぬまま過ぎていたまさかそんなに急に亡くなるとは思っていなかったのに、はからずも悲しい電話がかかった。

十月二十七日午前二時、四十八才の寿命を終ってツルエさんはお浄土の本国（ふるさと）に帰ってしまったのである。私は早速出発して夜十一時四十分松永に着きました。ツルエさんの病気の様子やら臨終の様子を姉さんから聞きました。入院して三日目に亡くなったとのことです。

私にもう一度会いたいともらしていたとのことですが、まさかこんなに急なことはないと油断をしていたとのことでした。思えば一昨年の九月二十日の夜、久し振りに対面して時間の過ぎるのをおしみつつお別れしたのがこの世での会いおさめであったとは、まことに懐しい思い出になりました。

さてツルエさんは、命終の時に、静かに天井を見まわしながら、両手を合わして南無阿弥陀仏と称えたとのことです。何という立派な最後でしょう。私はこれを聞いて嬉しかった、元より浄土真宗のお救いは臨終に念仏称えたからきまるのではなく、平生に信ずる一念に定まるのであるから、臨終に南無と半口称えぬまま終っても、かならずお助けに間違いないのであるが、日頃から救われた喜びにいきる人のたしなみとしてこうした落着いた姿勢を残されたということは真実信者のカガミとして大いにたたえるべきであります

ツルエさんの姉さんがこんなことをいわれた。ツルエさんが死ぬる前に手を合せ念仏する姿を見た時「マアこの子は気持の悪いことをする子じゃ」と、その手を引きはなしたとのことである。何という愚かな所作であろうか？手を合したり念仏するということは不吉なことのように思っているのは大きな間違いである。南阿無弥陀仏のおイワレを

聞き開いた人が手を合せて念仏する姿は、無限の大光明と無限の大慈悲の中につつまれて如来と一つになった姿であり、もはや死というものに用事のなくなった、さとりの境地に生きる姿であるからこれ程芽出たい幸福の姿はないのである。「何んのその、百万石も笹の露」という広大無辺の天地に遊ぶという心の世界が合掌念仏の姿であります。

歎異鈔第五章

花田正夫

①親鸞は父母（ふも）の孝養（きょうよう、供養）のためとて一遍にても念仏もうしたることいまだ候わず。

②その故は、一切の有情（うじょう）は皆もて世々生々の父母兄弟なり。

③いずれもいずれもこの順次生（じゅんしょう）に仏になりてたすけ候うべきなり。

④わが力にてはげむ善にても候わばこそ念仏を廻向して父海をもたすけ候わめ、ただ自力をすててい そぎ覚（さとり）をひらきなば、六道・四生のあいだいずれの業苦（ごうく）に沈めりとも、神通方便をもてまず有縁（うえん）を度すべきなりと、云々。

本章を鏡として、親に対する子心の実際と、そのすくいの道を知らされる。先ず第一節に、

親鸞父母の孝養のためにとて一遍にても念仏もうしたることいまだ候わず。

とある。ここで孝養とは亡き親への追善供養のことであるが、聖人は幼い時父母に別れ、叡山に登って出家せられた。そこに亡き親の菩提をとむらい、供養の志も真剣にお考えになったことであろう。ことに当時の仏教として、鎮護国家と追善供養は大きな風潮であった。

さて、歎異鈔に語られる聖人は、おそらく八十路を越えられていると思う。その聖人が御自身のあゆまれた跡をふりかえられて「父母孝養のためにとて一遍にても云々」と述懐懺悔されている。これは決して、孝養しなくてもよいと仰言るのではなく、せねばならぬことは当然であるが、

ここで私は、私をたすけとげて、成仏させて下さる弥陀仏は、私に縁のある人々をも、一人のこらずたすけて下さることをたのむばかりである。仏心は平等にしてさらにおへだてのないのに、自分だけはたすけられるが、他の私に縁ある者はどうなるかわからぬなどと思うことが、広大無辺の仏力を、わたくし視して狭いひとりよがりの洞窟におちている姿である、換言すれば尽十方無碍の仏力をまだ信じられていないからである。

だからたすかるたすからぬの問題ではなく、弥陀仏の深いお誓の厳然と成就されているかぎり、すでに信ずる人もあり、今信ずる人もあり、これからさきに信ずる人もある。それは、その人その人に相応した時節に、春咲く花もあり、秋薫る花もあるというように、一人のもれなく慈育され、引導されて、念仏成仏せしめて下さるのである。

法然上人のお歌に

月影のいたらぬ隈はなけれども　眺むるひとのこころにぞすむ、とその消息を詠じておられる。

仏力の独壇場

第四節に

わがちからにてはげむ善にても候わばこそ念仏を廻向して父母をもたすけ候わめ、ただ自力をすててい そぎさとりをひらきなば、六道四生のあいだいずれの業苦に沈めりとも、神通方便をもてまず有縁を度すべきなりと云々

伊勢の村田静照師の「ねぐさり」の中に、次のようなことが記されてある。師は数年の間、八幡市の万行寺、七里恒順師の導きをうけて郷里に帰られたが、仏縁の薄い鳥羽に念仏の草庵をもとめ、或は婦人会、青年会等々に呼びかけて、漸く三十人ばかりの念仏の集いが出来るまでになった。その努力は非常なもので、紅茶色の尿が出ると云う有様であった。そうした時、フト、自分は他人様にこのように念仏をすすめているが、父が一向に聞いてくれぬ、これは非常なあやまりである。申しわけのないことであったと慚愧されて、生家に帰って、父上に、七里和上はまだ御存命であるから是非ともお参りして聴聞されよ、と勧めると農作業が忙しいし、九州までの旅費も大変だ、とのことであった。そこで農閑期を見はからって、師は旅費を工面して、父上に勧められると、お前がそこまでしてくれるのならと出掛けられた。さて帰りの日を待って駅に迎えに出られると、父上は、一本の帯を出して、さすが博多は帯の産地だけあって、こんな立派な帯が安く買えたよ、と語られて、和上の法話はチッとも耳に残っておらなかった。

その刹那、村田師は、仏法のことばかりは、親が子をも

子が親をもどうすることも出来ない、ただ南無阿弥陀仏様のおひとりばたらきであったと、痛感せられると共に、それからというものは、お念仏ひとつに生涯を打ちまかせられた。師はそこで、人間の力の限界を自覚して、その故に顕現せられる仏の大慈大悲の本願力ひとつを仰いで、それに満足された念仏生活であったと。

さて、この節のはじめに、

「わがちからにてはげむ善にても候わばこそ、念仏を廻向して父母をもたすけ候わめ、ただ自力をすててていそぎさとりを開きなば……」

とある。そもそも念仏とは、自分の力で迷いを離れることも出来ず、また父母兄弟をもたすけとげることの出来ないしたがって、われひとともにはてしない生死の苦海に流転するをさだめとする外ない者を、かねてしろしめされて、悲心やむかたなく、その者をこそたすけんとしてあらわれて下さる本願力である。

この本願力ましましてこそ「別離久長にしてさらに相い逢うことない」身も、「俱（とも）に一処に会する」という、またとないよろこびをあたたえられるのである。

自利利他の　行満足や　阿弥陀仏（内田卓二）

○

まず有縁を度すべきなり

最後に、たとえ六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）や、四生（胎生・卵生・湿生・化生と色々の生れ方をする生きとし生ける者）の、どこで迷い苦しんでいようとも、仏のもつ通力（天眼通・天耳通・神足通・他心知通・宿命通・漏尽智通）と、たくみな手だてによって、どの様な罪障の苦に沈んでいようとも、まず縁の近い者から漸次にすくいとげることが出来ると、聖人は仰言る。

これはもとより聖人のおひとり合点ではなくて、仏のお誓いをそのままにお知らせ下さったのであるから私共としては、唯仰ぐべく信ずべきことで、そこに加えることも減じることもないのであるが、ここで仏のさとりの世界の片鱗をうかがおう。

さて仏のさとりの世界を説かれているのは華厳経（けごんきょう）であるが、その最后の入法界品（にゅうほっかいぼん）に、釈尊の求道魂の象徴として、善財童子の求道の姿が詳しく述べてある。そこに童子の善知識には、仙人あり、医師あり、船頭あり、幼童あり、暴君あり、遊女あり、更に私共に想像もつかぬ無数の知識に導かれてのちに、御妃や、仏母マヤ夫人を知識とし、最後に文珠（もんじゅ）、普賢（ふげん）の大菩薩によって西方浄土へ導かれて成仏するとある。

我々は立派な先生とか、善い知識というように、自分に

尊敬出来ると思う人々ばかりを師として、他をかえりみないが、善財童子には一切の人々、親疎の別なく、老少の隔てなく善知識となっていることは、成仏の暁には、相対善悪・是非を超越するばかりでなく、あらゆる人々を全理解してその胸におさめ、その者に同じることによって、自然に一切が転悪成善（てんあくじょうぜん）されることを知らされる。かくて、六道四生という一切の迷いの世界に入って、その者に業苦から脱せしめることの出来るのは、ひとり成仏のあかつきを待たねばならぬ。しかもかかることは、我々が祈って得られるとか、求めて与えられるというようなものではなく、仏の誓願の自然によって恵まれるのである。

○

白井・福島の両先生のお味わい

本章を終るにのぞみ、白井成允先生は、母堂に死別せられてから、その母堂のことが気にかかり、亡き母の救いは何処にとたずねられた挙句、孔子の教でも、聖書の中にも見出されず、本章をお読みになって、はじめて、先だつ者もおくれる者も共にすくいの光りのあることを知られ、専ら聞法せられて、やがて念仏者となられてのちに、深くかえりみられ、「母を救うなどとは思いあがったことであった、母の死によって聞法の縁を開いて下さったので、母こそ私を救うために現れて下さった仏の御使であった。仏の御使者を迷える凡夫の身を持ってたすけようなどと考えたことは慚愧にたえぬ」と語って居られる。

また福島政雄先生は、母堂の亡くなられた時、歎異鈔を棺の中におさめ、この章を誦しながら送られたが、「これは我心得顔の慢心であった」と述懐して居られる。また「母は私にとって仏様です」とも常に仰言っている。

両先生のお味わいは、善財童子の仏母マヤ夫人を知識とされる信境にも通じるもので、ありがたくお聞き申している。

○

表裏相応

秀存師語録

嫁がどうしても衣服を下女にたたませなんだのは、衣服の表は立派なれども、その裏が切れ切れの木綿であるのを他人に見られるのがいやなためなり。里に帰りてはこれを脱ぎすてて置くのを、母のたたむにまかすことの出来るのは、母は裏も表も能く知っているがためなり。

まだすべてをまかすことの出来ぬのは大慈大悲の親様を他人と思う故ならずや。

あとがき

年末、年始にかけて、すべての日本人の眼が大学の紛争の上に注がれている。すでに六十数校できびしい闘争がくりかえされているときくが、私共門外漢が軽卒にあれこれと申すべきことでなく、冷静にその正体を見きわめて、新しい真実日本の教育の道が打ち建てられる日を待望している次第である。

さてどの大学でも紛争の発端は、学生寮の問題とか、学園の不正とか、学生処分の不当、等々と単純なことであるが、それに対応する学校側の対度の中に所謂「口あいてはらわた見せる蛙かな」で、新時代に適応出来ない種々の病根も見えて、学生側もあらためて大学を見直すと共に、いよいよ改革を叫ぶ声が高まっている。そうした動きの中にあって非常に残念なことは、政治闘争に移行していることである、これではいよいよ紛糾するばかりである。

一日も早く誰もがうなづける新指針が生れ出ることを祈念してやまぬ。

近角先生は「お慈悲ひとつで人生手放し」とよく云われたが、米国一辺倒でもなく中ソの模倣でもなく、真実なるものに照らされた日本固有の道のひらかれる日を待望してやまぬ、敗戦後に借りた着物ではもう間に合かなくなったことを痛感する、みんなで裸になってその建設にとりかかりたいものである。

○

近角先生の信仰の質疑へのお答えは、御懇切で周到、よく読まして頂きたいものであります。

榊原師の一道会の記は、本年病気不参の私には、居ながらにその場をありありと心に浮べられてありがたいもので、あとは次回に連載させて頂きます。

北米サンジョセの北条恵実さんの「聞光」二十年記念を祝して、聞光録を頂きました。岡本かの子女史の詩も同誌に五月の母の日に紹介されたものであります。

大阪の木本達縁師の毎月信徒の人々にくばられる「信楽」誌から、藤原ツルエさんの信の姿を転載させて頂きました。師の真剣な歩みの一端を知ると共に御健在を祈るばかりであります。

私の歓異鈔は、入院中にベッドの上で書きおろしましたもので、聖人の御言葉を身一つに頂くよすがとしたものでありますので解釈ではありません。皆様方もお一人お一人聖人の仰せを鏡とされて、御自身を照らして頂きたいものであります。

御案内

◆ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
市電、新郊通り一丁下車、東へ入ル三筋目左入ル

◆ 毎月二十四日、午前・午后、法話会。
昭和区小桜町教西寺、
市電、御器所通り下車、桜花学園東側
二月は休みます。

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　吉野穂志郎
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発行所　慈光社
　　名古屋市南区駈上町二ノ八八
振替口座　名古屋一〇四七〇番

慈光第二十一巻第二号　昭和四十四年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可